

小説2020年、第10回米ー1グランプリ

審査員
鈴木和雄

審査員
宮内 留雄

伊藤
蘭越



この小説を、らんこし米と蘭越町を愛する人々に贈る。

「第10回米ー1グランプリ・イン・札幌。グランプリに輝いたのは…」
ドラムロールが鳴り響く。息をのむ出場者と観客。ドラムの音がふっと途切れる。司会者の声をはじける。

「蘭越町の黒川利光さんが育てた、ゆめぴりかです！」
「やった！」

その瞬間、黒川は両拳を天に突き上げ、ガッツポーズ。生真面目な顔がほころぶ。会場から大きなどよめきと拍手が湧き上がった。

2020年11月。全国で一番うまい米を食べ比べ審査で決める「米ー1グランプリ」は第10回大会を迎えた。節目の大会を記念して、決勝は初めて蘭越を飛び出した。

会場は札幌市内の「真駒内アイスアリーナ」。夏の東京五輪が成功し、その余韻が残る中、1972年に札幌五輪のメインスタジアムとなった舞台を会場に選んだ。

観客は2千人を超えた。札幌や蘭越をはじめ、道東や道北からも多くの人々が駆け付けた。アリーナではグランプリ審査のほか、全国のブランド米で作ったおにぎりを味わったり、米の重量当てなどのイベントを楽しむ人々でごった返し、全国一の米イベントにふさわしい

活況を呈した。

そして、表彰式。

向山博委員長から、実行委の事務局長も務める黒川に表彰状とトロフィーが渡された。

「黒川君、おめでとう」

「ありがとうございます」

二人は固く握手。向山も満面の笑み。思えば、この10年、実行委メンバーが入賞を果たしたことはなかった。それが一気にグランプリを獲得したのだから、喜びもひとしおだ。

黒川は町内でも指折りの農業者の一人。米作りの研究に余念がない。秋の収穫後には田んぼに稲わらをすき込み、栄養を補給する。育苗中の稲には玄米黒酢を与え、うま味の向上を図る。それらの地道な努力は実を結び、黒川の米は全国に多くのファンを持つ。

仲間の農業者が黒川に駆け寄り、握手と抱擁を交わす。歓喜の輪が広がる。

その光景を少し離れた場所から見つめていた向山の脳裏に、この10年間のさまざまな記憶が走馬灯のように駆けめぐった。



2011年4月、グランプリは産声を上げた。3月11日には東日本大震災と東京電力福島第1原発事故が発生し、日本中が恐怖と悲しみに打ちひしがれていた。あれからまだ1カ月も経っていない。

「こんな時期にイベントを開いてもよいだろうか」。躊躇する声もあったが、「こんな時だからこそ、自分たちができることをして、少しでも被災地を励まそう」との思いが勝った。

春は名のみ、底冷えのする寒い夜。農業者の有志は、実行委の母体となるサポート委員会を立ち上げた。委員長には向山が就任した。グランプリはまだ山のものとも海のものとも分らなかったが、向山は熱い思いを胸にたぎらせていた。

「らんこし米を日本一のブランド米にしたい」

羊蹄の山肌を厚く覆っていた雪が解け始め、ニセコにも遅い春が芽吹き始めたころ、向山や黒川、副委員長の椿新二らは活動を始めた。蘭越町役場の協力も受けながら、道内の自治体や農協を回って米の出品など協力を要請。全国の米コンテストに出品する常連の農業者にも呼び掛け、265点の米が集まった。

その年の11月。記念すべき第1回大会が開かれ、グランプリには蘭越の若手農業者、宮武正人の「ゆめぴりか」が輝いた。「出来レース」との批判も浴びたが、真正正銘の栄冠。会場には800人が訪れ、らんこし米のおいしさをあらためて実感した。運営もスムーズに進行し、大会は大成功に終わった。

翌年の第2回大会は、食味分析計による予選審査を廃止した。分析計は米に含まれるタンパク質を測り、うまさを数値で示すが、実際の食味としばしばずれが生じる。

「丹精込めた米を機械で判定するなんて失礼だ」
農業にかける全国の同志への連帯感もあった。

分析計に代わって、審査に臨んだのは全国の調理師や料理学校の学生たち。全国の米210点を実行委が郵送し、「食のプロ」の学生たちが味わい、決勝進出の30点を決めた。

グランプリには岐阜県の「いのちの壺」が選ばれた。「いのちの壺」は粒が大きく、他の米より目立ち、甘みも豊富。らんこし米の手強いライバルとなることを予感させた。

第3回大会には233点が集まり、上位6点のうち「ゆめぴりか」が5点を独占、道産米

の実力を見せつけた。



ただ、その頃から、実行委の中に微妙なずれが生じ始めた。大会規定によると、上位30点に選ばれた生産者は決勝に参加するのがルール。だが、本州から北海道を訪れるのは骨が折れる。参加できない場合、その米は決勝に進めない。

「真の日本一を選ぶためには、生産者が参加できなくても仕方がない」

「グランプリに選ばれた生産者が会場にいないのでは、大会が盛り上がらない」
議論は白熱し、メンバーはなかなか結論を出せず、疲弊した。

だが、想像もしなかった追い風が吹いた。国は長年続けてきた農業政策を180度転換。米の生産調整（減反）の廃止である。

大会にはこれまで、コシヒカリなどブランドの地位を確立した米は出品を控える傾向があったが、減反廃止後は状況が一変。米の自由競争に勝ち残るため、大会で名を売ろうとする

生産者が続出した。

出品数は一時の倍の500点を超え、生産者はこぞって道内を訪れるようになった。課題は一気に解決し、大会は勢いづいていった。



黒川が栄冠に輝き、興奮冷めやらぬ控室。実行委のメンバーを前に向山が切り出した。

「黒川君、今日は本当におめでとう。実は一つ提案がある」
にぎやかな宴が、いつとき静まる。

「今回で僕は委員長を退く。これからは顧問として大会を支える。後任は黒川君にお願いしたい」

顔を見合わせるメンバーたち。だれも声を発しない。

向山は続ける。

「僕も70歳になる。これからは、もう少し若い世代を中心に大会を運営してほしい。どうだろう、黒川君」

黒川は突然のことに考えがまとまらず、表情を少しゆがめた。

その時、メンバーの中からかすかな拍手が起こり、それはすぐに大きな響きとなった。

黒川は意を決したように、ゆっくりと語り始めた。

「分かりました。微力ですが、全力を尽くします。これからも応援をよろしくお願いします」

「ありがとう」

向山は肩の荷を下ろしたように、穏やかにほほ笑んだ。

黒川と向山はこの日2度目の固い握手を交わした。

「頑張つて」

「これからも、よろしく」

拍手と歓声の輪は大きく広がり、メンバーを温かく包み込んだ。

向山はしみじみと振り返った。

「黒川君の米が日本一に輝き、らんこし米を日本一の米に育てる夢は、ある程度果たすことができた。いろいろなことがあったが、大会を続けてきて本当によかった」

この小説に描かれた過去は事実近く、未来は虚構と願望である。

著者 伊藤 蘭越（いとう・らんえつ）

書道家。本名、性別、年齢不詳。らんこし米と蘭越町をこよなく愛する。青春時代はキャンデイズと水谷豊のファンだった。

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト